

## 清代18省における「北京首都圏」の 地方行政管理上の特質 (上)

——「衝繁疲難」制度に現れた行政管理難易度——

真 水 康 樹

### は じ め に

本稿は「衝繁疲難」制度をもとにして、清代の中央権力が「全国18省」の各1級行政区を地方行政管理の観点からどのように捉えていたのかについて考察を試みようとするものである。また、こうした全国各省との比較において、「北京首都圏」がどのような特質を持っていたのかについても併せて考察することを目的としている。

「衝繁疲難」制度は広西布政使郭銑の考案になるものであり、郭銑の建議が出された1728年(雍正6年)にその起源をみることができるが、正式には1731年(雍正9年)12月になって制度化されることとなった。この制度は直接的には各地方官ポストにつき、その地方の行政管理の難易度とその難易の性格を簡潔に表示することを目的としていた。「衝繁疲難」とは、「衝」で交通の頻度の高いことを表現し、「繁」で政務の激しいことを、「疲」で税の滞納の多いことを、そして、「難」で民衆の気が荒く犯罪の多いことを現わし、具体的には、この4文字の組み合わせによって、地方行政単位である府、州、県などの行政管理の難易度とその性格を同時に表現したものである。この制度の創設によって、4文字全ての組み合わせから、3文字の4種類、2文字の6種類、1文字の4種類、そして、文字無しまで、計16通りの行政管理難易度とその性格の表示が可能になった。それは、文字の数が行政

管理の難易度を表すとともに、各文字がその難易度の性格を同時に表示するという画期的な制度の誕生であった<sup>(1)</sup>。この制度が実施に移された1731年には、この制度にもとづいて、全国各地の地方行政区の衝繁疲難の表示が確定されたはずだが、この実施初期の状況については、長らくその全体像を体系的に示す資料がなかった。

本稿で用いる5種類の資料のうち、年代的に最も古いものは1745年（乾隆10年）刊とされる清華大学図書館典藏部所蔵の『紳縉新書』である<sup>(2)</sup>。上述の通り、1731年が制度の起点であるが、その起点にどこまで近接した資料が出現しうるのか定かではない。この1745年の資料は、少なくとも筆者がこれまで収集した中では、最も古いものである。本稿では、この資料を含め全部で5種類の資料に拠りながら、まず「全国18省」の具体状況の検討を行うこととしたい。

1758年（乾隆23年）刊行の乾隆『大清会典』には「兩京設尹，崇首善也。外列十有八省，分之為府，府領州縣，直隸州亦領縣，皆屬於布政使司而統治於總督巡撫」<sup>(3)</sup>という表現があり、清初の15省体制に対してこの時点では「18省」が成立していたと見られる。18省体制成立の起源については、直隸以外の全国17省に布政使司が置かれた1667年（康熙6年）と考えることができるし、もしくは、1省1巡撫体制が18省にしかれた1665年（康熙4年）とも考えることができる<sup>(4)</sup>。

直隸は首都を擁する順天府の所在地であるが、直隸を東から時計回りに囲む形で山東省、河南省、山西省があった。清代の内地18省においては、通常、各省に地方行政長官として巡撫が派遣され、2省から3省ごとに総督が配置され、地方行政長官同士の相互牽制が図られた。しかしながら、山東省、河南省、山西省の3省には総督がおかれず、巡撫のみが配置されるという特殊地域であった。その最大の理由は、この3省が直隸に隣接することから、中央による直接の監督が可能であったことにあると考えられる<sup>(5)</sup>。筆者としては、この地方行政長官の特殊な配置を一応の根拠として、直隸とこれら3省によって構成さ

れる地域を清代の「北京首都圏」として考察の対象とすることとした。したがって、以下本文中において、「(北京) 首都圏4省」とは、直隸、山東省、河南省、山西省のことを意味する。

## 一 全国18省と北京首都圏4省の行政管理難易度

最初に「衝繁疲難」制度にもとづいて、全国18省及び首都圏4省の行政管理難易度を算出して数値化してみることとする。いま、「全国」、「首都圏4省」、そして全国18省の計20項目をたてる。データの基礎は、全国1466県(散州を含む)<sup>(6)</sup>、直隸141県、山東省107県、山西省95県、河南省105県(首都圏4省の合計は448県)、陝西省78県、甘肅省53県、江蘇省65県、安徽省55県、浙江省77県、福建省62県、江西省77県、湖北省68県、湖南省67県、広東省87県、広西省93県、四川省123県、貴州省48県、雲南省65県である。各省について、4字缺の県には4ポイント、3字缺の県には3ポイントを与え、2字缺は2ポイント、1字缺は1ポイント、無字缺は0ポイントとして各時代の各省ごとに加算していき、総数値を各省の総県数で除することとして、各省の行政管理難易度を算出してみた。それが次頁表1-1である。当然、数値が高いほど行政管理難易度は高くなる。つまり、行政管理が難しかったということになる<sup>(7)</sup>。

まず、全国平均の行政管理難易度の時代的推移を見てみる。1788年の数値が若干高いものの、全体的には160年ほどの期間を通じて数値の変化はそれほど激しくないことがわかる。平均値で見る限り極めて安定した状況がそこにはうかがわれる。1757年の1.41を最低とし、1788年の1.48を最高とする。その差は、0.07である。この数値が、清代の行政管理難易度の変化について、もっとも抽象化された観察世界を構成する。全時代、全地域を対象にして最大幅を探れば、1757年陝西省の0.81を最低とし、1911年の江蘇省の2.29を最高として、その差1.

48が理論的に存在する最大差である。本項ではいましばらく、この強度に抽象化された観察世界に内在して分析を行う。

表1-1：数値化された行政管理難易度の変遷（1745年から1911年）

	全 国	直 隸	山 東	山 西	河 南	4 省
1745年	1.42	1.43	1.46	1.14	1.26	1.33
1757年	1.41	1.50	1.47	1.16	1.37	1.39
1788年	1.48	1.62	1.50	1.19	1.42	1.45
1809年	1.27	1.28	1.54	1.12	1.39	1.33
1911年	1.47	1.58	1.53	1.15	1.34	1.43
平均値	1.45	1.53	1.49	1.16	1.35	1.40

	陝 西	甘 肅	江 蘇	安 徽	浙 江	福 建
1745年	0.85	1.94	2.12	1.47	1.77	1.82
1757年	0.81	1.85	2.14	1.78	1.69	1.79
1788年	1.10	1.87	2.20	1.85	1.74	1.73
1809年	1.06	1.87	2.25	1.82	1.73	1.13
1911年	1.12	1.83	2.29	1.87	1.45	1.81
平均値	0.97	1.87	2.19	1.74	1.66	1.79

	江 西	湖 北	湖 南	広 東	広 西	四 川
1745年	1.82	1.43	1.60	1.25	0.89	1.31
1757年	1.79	1.22	1.45	1.24	0.90	1.33
1788年	1.77	1.29	1.51	1.23	0.90	1.27
1809年	1.05	0.79	1.15	1.08	0.78	1.07
1911年	1.83	1.28	1.55	1.25	0.90	1.35
平均値	1.80	1.31	1.53	1.24	0.90	1.32

	貴 州	雲 南
1745年	1.38	1.32
1757年	1.38	1.00
1788年	1.75	1.35
1809年	1.33	0.86
1911年	1.60	1.43
平均値	1.53	1.28

全国平均について、さらに、全時代を通じた平均値を出してみると、1.45ということになる。この数値を基準にして18省を分類してみると、行政管理難易度の高い順から以下のような順番となる。江蘇省2.19、甘肅省1.87、江西省1.80、福建省1.79、安徽省1.74、浙江省1.66、直隸1.53、湖南省1.53、貴州省1.53、山東省1.49であり、この10省が全国平均値よりも総じて行政管理が難しい地域ということになる。これに続いて、全国平均値よりも行政管理難易度が低い省として、河南省1.35、四川省1.32、湖北省1.31、雲南省1.28、広東省1.24、山西省1.16、陝西省0.97、広西省0.90ということになる。平均以下の省は8省である。

もっとも、平均値1.45前後は、むしろひとつのグループを構成すると考えた方が合理的であろう。したがって、整理すれば行政管理難易度の高い省は、江蘇省、甘肅省、江西省、福建省、安徽省、浙江省であり、中間のグループとして、直隸、湖南省、貴州省、山東省、河南省、四川省、湖北省が想定され、行政管理難易度が低いグループは、雲南省、広東省、山西省、陝西省、広西省ということになる。

ここにおいて次の4つの点を指摘することが可能である。

- (1) 江蘇省、安徽省、浙江省といった長江下流域を構成する比較的生産力が高い地域の行政管理難易度が高い。行政管理難易度の高さは、徴税に伴う行政負担、あるいは抗税に伴う管理負担等の要素を反映していると考え得る可能性がここに存在する<sup>(8)</sup>。江西省も長江流域に位置するが上記グループに一括できるか否かは留保を要する。
- (2) 四川省、雲南省、広西省等のいわゆる西南の少数民族地域において、予想外に数値が低い。もっとも、この地域についてはそもそも、明らかな少数民族地域である土司の多くが統計に含まれていない。つまり、この行政管理難易度の数値の高低には、少数民族地域の管理負担の要素はあまり考慮されていないといえる。し

たがって、翻って考えれば、貴州省が平均以上の行政管理難易度の数値を示していることは、貴州が少数民族地域であること以外の理由に求められなければならないということを意味する。

- (3) 首都圏から黄河上流へ向かう中間地域である山西省と陝西省の数値が低い。特に陝西省の数値の低さは、甘粛省の数値が高いだけに、いっそう意外に見える。山西省と陝西省の数値の低さには共通の理由を想定して構わないのかも知れない<sup>(9)</sup>。

- (4) 首都圏4省であるが、山西省を除けば他の3省は全て中間の難易度の省グループを構成する。この点は、首都圏の行政管理難易度と全国平均との類似性の背景となっている。

次に、時代の変化に伴う全国平均の数値の変化と、各省の数値変化との相関関係を考えてみる。

まず、1745年から1757年にかけてであるが、全国平均は0.01の微落である。つまり、行政管理難易度は極僅かに低下している。しかし、それに反して、数値が上昇している省が8省もある。直隸、山東省、山西省、河南省、江蘇省、安徽省、広西省、四川省がそれである。首都圏4省がすべてそこに含まれ、つまりは、全国平均と反対の傾向を見せていること、したがって、4省平均にしても、全国平均とは反対に数値が増加していることは指摘するに値する。

1757年から1788年にかけては、全国平均値が0.07上昇した。それに対し、福建省、江西省、広東省、四川省の4省で難易度が下落している。特に、福建省、四川省では落ち込みの程度も小さくない。

1788年については、ほとんどの地域で数値が高めであるが、この数値の高さは、当該資料の視点（スタンダードの特殊性）の問題ではなく、当時の現実を反映したものであったと筆者は考えている（註(13)を参照されたい）。

1788年から1911年は、いささかタイムスパンの長い変化であるが、全国平均は微落である。これに対して難易度が上昇したのは、山東省、

陝西省、江蘇省、安徽省、福建省、江西省、湖南省、広東省、四川省、雲南省の10省でむしろ難易度が上昇した省の方が多い（広西省は変化なし）。

長期的な変化をみると、四川省のみが常に全国の動向とは逆の動きをしている。もっとも変動の幅はさほど大きくはなく、この変動に特定の意味づけをするのは困難である。一貫して難易度の上昇を示したのは、山東省、江蘇省、安徽省の3省である。他方、一貫して下落傾向を示した省は存在しない。行政管理難易度の点で、ほとんど目に見えた変化がなかった省として、江西省、山西省をあげることができる。

1745年と1911年では、全国平均値は0.05上昇している。つまり、行政管理難易度は上昇したわけである。しかしながら、これに反して、甘肅省、浙江省、福建省、湖北省、湖南省などでは、逆に難易度は低下している（広東省では変化なし）。首都圏4省の平均値は、変化のプロセスはともかく1745年と1911年の数値で較べれば、全国平均値にならって増加している。また、首都圏を構成する4省それぞれについても同じである。

最後に、首都圏4省平均についてみると、その行政管理難易度の数値は、各時代について、全国平均よりやや低めで、しかもそのやや低めのレベルでほぼ平行に推移している。これは首都圏の行政管理が、首都圏全体として見る限り、全国的に考えてもそう難しくはなかったことを意味している。もっとも、4省平均ではなく、個々の省について見ていくと、首都圏は直隸・山東省グループと、山西・河南省グループにまず二分されうる。すなわち、直隸・山東省では行政管理難易度が一貫して、全国平均の行政管理難易度よりも少し高めである。つまり、直隸省、山東省は全国平均に較べて行政管理が僅かであるが難しかったと推測することが可能であり、2省ともに、首都圏4省の平均に較べても高いので、直隸・山東省が4省平均の行政管理難易度を高める作用をしていることが知れるのである。

他方、山西・河南省では事態は逆であり、行政管理難易度はどの時代にも常に全国平均を下回っている。この傾向は特に河南省よりも山西省においてさらに顕著である。また、山西・河南省ともに、4省の平均に較べても低く、この2省が首都圏の行政管理難易度の平均値を押し下げていることは明らかである。つまり、省レベルでみれば、清代の北京首都圏は行政管理が比較的難しい直隸・山東省と、比較的容易な山西・河南省に2分されるということになる。もっとも全国平均でみれば、直隸も、山東省も、河南省も中間グループに属し、数値が特に高いグループには入らない。つまり、首都圏を構成する4省のうち3省は、極めて平均的な省であると考えられるわけである。しかしながら、このうち特に、山西省だけは、全国的に見ても数値のかなり低い、つまり、行政管理の容易な省だったのであった。

## 二 各時代における全国18省と北京首都圏4省の「缺」構成

ここでは前項の難易度算出のもとになったデータを取り上げ、各省で4字缺、3字缺、2字缺、1字缺、さらに無字缺がどの程度の割合を占めていたのか、その比率を検討していく。ここで、資料は前項ほどには抽象化されず、分析はある程度の具体性をとりもどすことになる。

まず、1745年について見ることにする。この時期、行政管理難易度が最も高い省は、江蘇省、甘肅省、福建省、江西省、浙江省の5省である。江蘇省の数値の高さは、何より4字缺の多さによる。江蘇省の4字缺の総数は12県である、同省の総県数に占める4字缺県の比率は、18.5%にもなる。全国に4字缺県は57県しかないわけであるから、全国の4字缺の21.1%が、全国の県総数の僅か4.4%を占めるに過ぎない江蘇省に集中しているわけである。難易度ではそれに続く甘肅省で



も、3字缺、2字缺の占める比率ではさほど変わらないのに、4字缺の占める比率はずっと低い。江西省と浙江省では3字缺と2字缺の構成比が高いために省全体の難易度が上がっている。この2省とも、特に3字缺の構成比は全国最高である。福建省では2字缺の役割が圧倒的に大きい。福建省では2字缺は実に全県数の半数近くを占め行政管理難易度を引き上げている。いずれにせよ、これらの難易度が高い省では、2字缺の割合がすべて30%を越えている点に特徴があり、無字缺が20%に達することもないという点で共通の特徴がある。

行政管理難易度が低い方では、陝西省、広西省、山西省、広東省、河南省の5省が比較的数値の低いグループを構成する。もっとも、河南省となると、数値が一番低い陝西省よりも、平均値との方が数値が近い。陝西省では、1字缺と無字缺を合計した構成比が、78.2%という高い比率を示している。特に、無文字缺の構成比は47.4%に達し、全国平均の倍近くになる<sup>(10)</sup>。次に難易度の低い広西省でも1字缺と無字缺合算の構成比は、63.4%でしかない。1字缺と無字缺の構成比で見ると、山西省の方が、67.4%と高い数値を示している。しかし、山西省では3字缺もなお、13.7%を占めるのに対し、広西省では僅かに3.2%でしかない。山西省と河南省では、4字缺が皆無である。4字缺がないのは、その他には、四川省と貴州省ということになる。4字缺が無い省の難易度はいずれも、全国平均を下回っている。この後

表2-1: 1745年各省各缺構成比統計

	全 国	直 隸	山 東	山 西	河 南	4 省
総 数	1466	141	107	95	105	448
4字缺	57(3.9)	7(5.0)	5(4.7)	0(0.0)	0(0.0)	12(2.7)
3字缺	216(14.7)	28(19.9)	22(20.6)	13(13.7)	11(10.5)	74(16.5)
2字缺	423(28.9)	31(22.0)	25(23.4)	15(15.8)	36(34.3)	107(23.9)
1字缺	361(24.6)	27(19.1)	20(18.7)	39(41.1)	27(25.7)	113(25.2)
無字缺	378(25.8)	39(27.7)	35(32.7)	25(26.3)	31(29.5)	130(29.0)
その他	31(2.1)	9(6.4)	0(0.0)	3(3.2)	0(0.0)	12(2.7)

	陝 西	甘 肅	江 蘇	安 徽	浙 江	福 建
総 数	78	53	65	55	77	62
4 字 缺	2 ( 2.6)	6 (11.3)	12(18.5)	2 ( 3.6)	1 ( 1.3)	6 ( 9.7)
3 字 缺	4 ( 5.1)	11(20.8)	13(20.0)	9 (16.4)	22(28.6)	7 (11.3)
2 字 缺	11(14.1)	18(34.0)	22(33.8)	18(32.7)	26(33.8)	30(48.4)
1 字 缺	24(30.8)	10(18.9)	7 (10.8)	10(18.2)	14(18.2)	8 (12.9)
無字缺	37(47.4)	7 (13.2)	10(15.4)	16(29.1)	14(18.2)	11(17.7)
その他	0 ( 0.0)	1 ( 1.9)	1 ( 1.5)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)

	江 西	湖 北	湖 南	広 東	広 西	四 川
総 数	77	68	67	87	93	123
4 字 缺	3 ( 3.9)	5 ( 7.4)	3 ( 4.5)	3 ( 3.4)	1 ( 1.1)	0 ( 0.0)
3 字 缺	21(27.3)	9 (13.2)	11(16.4)	9 (10.3)	3 ( 3.2)	10( 8.1)
2 字 缺	24(31.2)	16(23.5)	22(32.8)	23(26.4)	21(22.6)	45(36.6)
1 字 缺	17(22.1)	18(26.5)	18(26.9)	24(27.6)	28(30.1)	41(33.3)
無字缺	12(15.6)	20(29.4)	12(17.9)	28(32.2)	31(33.3)	26(21.1)
その他	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)	0 ( 0.0)	9 ( 9.7)	1 ( 0.8)

	貴 州	雲 南
総 数	48	65
4 字 缺	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)
3 字 缺	6 (12.5)	7 (10.8)
2 字 缺	19(39.6)	21(32.3)
1 字 缺	10(20.8)	19(29.2)
無字缺	8 (16.7)	16(24.6)
その他	5 (10.4)	1 ( 1.5)

（注）無字缺には、まったく何の記載もないものと、「簡」と書かれているものとが含まれている。「簡」は事実上無字缺と考えて良いという判断による。次項ではそれぞれの統計値も紹介する。

もずっと4字缺がないのは、この4省に限られる。

1745年の首都圏について見てみる。前項で指摘した通り、首都圏には、直隸・山東省グループと、山西・河南省グループとの差が見られる。直隸・山東省では、4字缺や3字缺の構成比が確かに、全国平均より高い。しかし、それはあくまで僅かであって、両省の文字缺構成はむしろ全国平均に類するものと考えた方が妥当であろう。それに対して、山西・河南省の方ははるかに低難易度グループに属する文字

構成を示している。無字缺が最も多い陝西省や広西省には及ばないものの、山西省では1字缺の割合が圧倒的に高く全国最高値を示している。文字缺構成の点でも、陝西省、広西省に準ずるものとなっている。また、山西・河南省とも4字缺がないという共通の特徴を示す。4字缺の絶対数としての少なさは、その省全体の実際の行政管理があるいは難易度の数値の低さ以上に容易だったことをすら想像させる。もっとも、構成比で見ると、河南省はいっそう中間グループ的な特徴を示している。直隸自身は、全国平均とほぼ類似の文字缺構成をとっている。首都圏4省平均もほぼそれになっているが、4省平均値を全国平均より下げさせているのは山西・河南省の作用だと考えることができる。

1757年について見ると、難易度が高いのは江蘇省、甘肅省、福建省、江西省、安徽省、浙江省の6省であり、安徽省が急浮上し、浙江省が数値を若干下げている。安徽省が急速に難易度を高めた理由は、1字缺が10県から1県に減少し、無字缺が16県から11県に減少し、代わって、2字缺が18県から34県に増えたことにある。この具体的な文字缺構成の変動の分析は、次項の課題であり、ここでは論点を指摘するにとどめる。他方、浙江省では3字缺の減少分が2字缺の増加となり、結果的に数値を低めることになっている。福建省の変化は顕著ではないが、その他の江蘇省、甘肅省、江西省でも、行政管理難易度はあま

表2-2: 1757年各省各缺構成比統計

	全 国	直 隸	山 東	山 西	河 南	4 省
総 数	1466	141	107	95	105	448
4 字 缺	56 ( 3.8)	9 ( 6.4)	5 ( 4.7)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	14 ( 3.1)
3 字 缺	197 (13.4)	27 (19.1)	25 (23.4)	14 (14.7)	12 (11.4)	78 (17.4)
2 字 缺	452 (30.8)	35 (24.8)	24 (22.4)	14 (14.7)	36 (34.3)	109 (24.3)
1 字 缺	346 (23.6)	24 (17.0)	14 (13.1)	40 (42.1)	36 (34.3)	114 (25.4)
無字缺	405 (27.6)	40 (28.4)	39 (36.4)	27 (28.4)	21 (20.0)	127 (28.3)
その他	10 ( 0.7)	6 ( 4.3)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	6 ( 1.3)

	陝 西	甘 肅	江 蘇	安 徽	浙 江	福 建
総 数	78	53	65	55	77	62
4 字 缺	2 ( 2.6)	6 (11.3)	10(15.4)	2 ( 3.6)	1 ( 1.3)	6 ( 9.7)
3 字 缺	4 ( 5.1)	6 (11.3)	12(18.5)	7 (12.7)	17(22.1)	6 ( 9.7)
2 字 缺	10(12.8)	24(45.3)	27(41.5)	34(61.8)	30(39.0)	31(50.0)
1 字 缺	23(29.5)	8 (15.1)	9 (13.8)	1 ( 1.8)	15(19.5)	7 (11.3)
無字缺	39(50.0)	8 (15.1)	6 ( 9.2)	11(20.0)	14(18.2)	12(19.4)
その他	0 ( 0.0)	1 ( 1.9)	1 ( 1.5)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)

	江 西	湖 北	湖 南	広 東	広 西	四 川
総 数	77	68	67	87	93	123
4 字 缺	3 ( 3.9)	4 ( 5.9)	3 ( 4.5)	3 ( 3.4)	1 ( 1.1)	0 ( 0.0)
3 字 缺	18(23.4)	10(14.7)	9 (13.4)	8 ( 9.2)	2 ( 2.2)	12( 9.8)
2 字 缺	28(36.4)	11(16.2)	19(28.4)	23(26.4)	26(28.0)	43(35.0)
1 字 缺	16(20.8)	15(22.1)	20(29.9)	26(29.9)	22(23.7)	41(33.3)
無字缺	12(15.6)	28(41.2)	16(23.9)	27(31.0)	41(44.1)	27(22.0)
その他	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 1.1)	0 ( 0.0)

	貴 州	雲 南
総 数	48	65
4 字 缺	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)
3 字 缺	7 (14.6)	1 ( 1.5)
2 字 缺	18(37.5)	19(29.2)
1 字 缺	9 (18.8)	20(30.8)
無字缺	14(29.2)	23(35.4)
その他	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)

り変わらないものの、文字構成には少なからぬ変化が観察される<sup>(11)</sup>。

難易度の低いグループとしては、陝西省、広西省、雲南省、山西省、湖北省、広東省の6省がある。河南省が抜けて、雲南省と湖北省が加わっている。河南省は無字缺が10県減少した一方、1字缺が9県、3字缺が1県増えたことが難易度を押し上げることになった。湖北省では2字缺、1字缺が減少し、その分無字缺が増加した結果、数値が低下している。雲南省では3字缺が6県減少したことが数値の低下を招

いた。当然のことながら、無字缺が同じ程度に増加している。陝西省、山西省の文字構成にはあまり大きな変化は見られないが、陝西省の無文字缺構成比は50%に達している。広西省では行政管理難易度に大きな変化はないが、文字構成には少なからぬ変化が見られる。特に無字缺県が10県増大して41県(44.1%)になり、絶対数の上では陝西省さえ凌駕するにいたっている。また、2字缺が5県増え、3字缺が1県、1字缺が6県それぞれ減少している。

首都圏についてみると、直隸・山東省は、行政管理難易度を若干高めたものの、基本的には中間グループに属する文字構成となっている。直隸では、4字缺が2県増加し、2字缺が4県増加したことが数値を引き上げることにつながった。山東省の行政管理難易度は微増にとどまるが、それは3字缺が3県、1字缺が4県増える一方、2字缺が1県、1字缺が6県減少するという変化がバランスした結果である。山西省にはあまり大きな変化は見られない。河南省は、いっそう、中間グループに近くなっているが、その理由は上述のとおりである。

1788年の統計に視線を向けると、全国合計の構成比において、3字缺の構成比率が高まっている。1788年の行政管理難易度を全国的に押し上げたのはこの数値の変化であった。構成比の点では、4.4ポイントの上昇に過ぎないが、64県という絶対数の増加はかなりの数である。3字缺とは対照的に、2字缺、1字缺の構成比が低下しており、この

表2-3: 1788年各県各缺構成比統計

	全 国	直 隸	山 東	山 西	河 南	4 省
総 数	1466	141	107	95	105	448
4 字 缺	55( 3.8)	9 ( 6.4)	5 ( 4.7)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	14( 3.1)
3 字 缺	261(17.8)	34(24.1)	28(26.2)	17(17.9)	16(15.2)	95(21.2)
2 字 缺	427(29.1)	34(24.1)	24(22.4)	13(13.7)	32(30.5)	103(23.0)
1 字 缺	308(21.0)	22(15.6)	8 ( 7.5)	36(37.9)	37(35.2)	103(23.0)
無字缺	406(27.7)	42(29.8)	42(39.3)	27(28.4)	19(18.1)	130(29.0)
その他	9 ( 0.6)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	2 ( 2.1)	1 ( 1.0)	3 ( 0.7)

	陝 西	甘 肅	江 蘇	安 徽	浙 江	福 建
総 数	78	53	65	55	77	62
4 字 缺	2 ( 2.6)	5 ( 9.4)	10(15.4)	2 ( 3.6)	1 ( 1.3)	6 ( 9.7)
3 字 缺	12(15.4)	11(20.8)	16(24.6)	12(21.8)	20(26.0)	5 ( 8.1)
2 字 缺	14(17.9)	20(37.7)	24(36.9)	28(50.9)	27(35.1)	31(50.0)
1 字 缺	14(17.9)	6 (11.3)	7 (10.8)	2 ( 3.6)	16(20.8)	6 ( 9.7)
無字缺	36(46.2)	9 (17.0)	8 (12.3)	10(18.2)	13(16.9)	14(22.6)
その他	0 ( 0.0)	2 ( 3.8)	0 ( 0.0)	1 ( 1.8)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)

	江 西	湖 北	湖 南	広 東	広 西	四 川
総 数	77	68	67	87	93	123
4 字 缺	3 ( 3.9)	4 ( 5.9)	3 ( 4.5)	3 ( 3.4)	1 ( 1.1)	0 ( 0.0)
3 字 缺	18(23.4)	12(17.6)	15(22.4)	8 ( 9.2)	3 ( 3.2)	12( 9.8)
2 字 缺	28(36.4)	11(16.2)	13(19.4)	25(28.7)	26(28.0)	40(32.5)
1 字 缺	14(18.2)	14(20.6)	18(26.9)	21(24.1)	19(20.4)	40(32.5)
無字缺	14(18.2)	27(39.7)	17(25.4)	30(34.5)	44(47.3)	30(24.4)
その他	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 0.8)

	貴 州	雲 南
総 数	48	65
4 字 缺	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)
3 字 缺	13(27.1)	9 (13.8)
2 字 缺	19(39.6)	18(27.7)
1 字 缺	7 (14.6)	21(32.3)
無字缺	9 (18.8)	15(23.1)
その他	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)

増加が2字缺、1字缺からの転換によるものであることは統計から推定される。この転換は地理的に全国のどこでなされたのだろうか。実は、3字缺の増加は全国ではほぼ万遍なく観察される。福建省で1県減（こちらにむしろ注目すべきかも知れない）であり、江西省、広東省、四川省で現状維持の他は、残り14省で3字缺の増加が観察される<sup>(12)</sup>。

行政管理難易度について高い数値を示すのは、やはり、江蘇省、安徽省、甘肅省、江西省、貴州省、浙江省、福建省の7省である（直隸

は、1.62で中間グループながら8位まで数値を上げている)。安徽省がさらにいっそう順位を上げたことと、貴州省の急上昇がまず注目される。安徽省の数値を押し上げたのは、3字缺5県の増加であり、それには2字缺6県の減少が対応している。貴州省の難易度の急速な上昇も、3字缺6県の増加によるものであり、それには無字缺の5県の減少等が対応している。江蘇省では3字缺が4県、無字缺が2県増える一方、2字缺が3県、1字缺が2県減少している。甘粛省では、4字缺が1県、2字缺が5県、1字缺が3県減少し、3字缺が5県増加している。浙江省では、2字缺が3県、無字缺が1県減り、3字缺が3県、1字缺が1県増えている。江西省、福建省については変化はほとんど見られない。

行政管理難易度の低い省だが、広西省、陝西省、山西省、広東省、四川省、湖北省の6省ということになろう。陝西省は相変わらず数値が低いことは確かだが、陝西省自体についてみれば大幅に数値をあげ、広西省との間で順位を入れ替えるに至った。雲南省が姿を消し、四川省が加わった。陝西省では1字缺が9県、無字缺が3県減り、3字缺8県、2字缺が4県、両者合計で12県も増えた。その結果、数値が大幅に押し上げられた。雲南省は無字缺が8県減った分3字缺が8県増えて、1745年に近い構成比になった結果数値が上昇した<sup>(13)</sup>。四川省自体の変化は2字缺、1字缺が僅かに減っただけでそれほど大きなものではない。広西省の変化も僅かなものである。広東省でも変化は主に1字缺と無字缺で見られ、それほど大きなものではない。山西省では3字缺が3県増える一方、2字缺が1県、1字缺が4県減少した。湖北省の数値の上昇は、3字缺が2県増加したことによるものである。

首都圏についてみると、4省合計では、2字缺、1字缺が減り、3字缺が17県も増えている。直隸の7県をはじめ、河南省の4県、山東省、山西省がそれぞれ3県と万遍なく増加し、全体に、首都圏各省の数値を上げている。その分は、2字缺、1字缺の減少でバランスがと

表2-4: 1809年各省各缺構成比統計

	全 国	直 隸	山 東	山 西	河 南	4 省
総 数	1466	141	107	95	105	448
4 字 缺	47( 3.2)	5( 3.5)	5( 4.7)	0( 0.0)	0( 0.0)	10( 2.2)
3 字 缺	209(14.3)	27(19.1)	28(26.2)	15(15.8)	15(14.3)	85(19.0)
2 字 缺	385(26.3)	30(21.3)	25(23.4)	12(12.6)	32(30.5)	99(22.1)
1 字 缺	274(18.7)	19(13.5)	11(10.3)	37(38.9)	37(35.2)	104(23.2)
無字缺	307(20.9)	38(27.0)	38(35.5)	27(28.4)	20(19.0)	123(27.5)
その他	244(16.6)	22(15.6)	0( 0.0)	4( 4.2)	1( 1.0)	27( 6.0)

	陝 西	甘 肅	江 蘇	安 徽	浙 江	福 建
総 数	78	53	65	55	77	62
4 字 缺	2( 2.6)	5( 9.4)	10(15.4)	3( 5.5)	1( 1.3)	5( 8.1)
3 字 缺	11(14.1)	11(20.8)	16(24.6)	9(16.4)	20(26.0)	4( 6.5)
2 字 缺	15(19.2)	18(34.0)	25(38.5)	30(54.5)	27(35.1)	17(27.4)
1 字 缺	12(15.4)	10(18.9)	8(12.3)	1( 1.8)	15(19.5)	4( 6.5)
無字缺	38(48.7)	7(13.2)	6( 9.2)	11(20.0)	14(18.2)	6( 9.7)
その他	0( 0.0)	2( 3.8)	0( 0.0)	1( 1.8)	0( 0.0)	26(41.9)

	江 西	湖 北	湖 南	広 東	広 西	四 川
総 数	77	68	67	87	93	123
4 字 缺	3( 3.9)	2( 2.9)	1( 1.5)	3( 3.4)	1( 1.1)	0( 0.0)
3 字 缺	6( 7.8)	6( 8.8)	11(16.4)	8( 9.2)	1( 1.1)	12( 9.8)
2 字 缺	22(28.6)	11(16.2)	13(19.4)	19(21.8)	24(25.8)	33(26.8)
1 字 缺	7( 9.1)	6( 8.8)	14(20.9)	20(23.0)	18(19.4)	30(24.4)
無字缺	4( 5.2)	10(14.7)	8(11.9)	17(19.5)	24(25.8)	18(14.6)
その他	35(45.5)	33(48.5)	20(29.9)	20(23.0)	25(26.9)	30(24.4)

	貴 州	雲 南
総 数	48	65
4 字 缺	0( 0.0)	1( 1.5)
3 字 缺	8(16.7)	1( 1.5)
2 字 缺	16(33.3)	16(24.6)
1 字 缺	8(16.7)	17(26.2)
無字缺	5(10.4)	16(24.6)
その他	11(22.9)	14(21.5)



られている。

1809年の統計については、総データ数1466県のうち、233県の読みとり不能がある。したがって、読みとり不能な部分の構成比は、15.9%に過ぎない。けれども、読みとり不能箇所は、直隸、福建省、江西省、湖北省、湖南省、広東省、広西省、四川省、貴州省、雲南省の10省、つまり、全18省の過半数に及んでおり、他のデータと同一に扱うことはできない。もっとも、山東省、山西省、河南省、陝西省、甘肅省、江蘇省、安徽省、浙江省の8省については、何の支障もなく、1911年の資料との間を繋ぐ存在として、その資料的価値は個別的には十分に存在する。しかしながら、全18省の分析を課題とする本稿においては、ひとまず使用を断念し、参考資料として提示するに止めたい(註(7)を参照されたい)。

1911年について見てみると、行政管理難易度の数値が高いのは、江

表2-5: 1911年各省各缺構成比統計

	全 国	直 隸	山 東	山 西	河 南	4 省
総 数	1466	141	107	95	105	448
4 字 缺	61( 4.2)	10( 7.1)	5 ( 4.7)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	16( 3.6)
3 字 缺	258(17.6)	34(24.1)	28(26.2)	17(17.9)	13(12.4)	92(20.5)
2 字 缺	430(29.3)	33(23.4)	25(23.4)	11(11.6)	34(32.4)	103(23.0)
1 字 缺	280(19.1)	15(10.6)	10( 9.3)	36(37.9)	34(32.4)	95(21.2)
無字缺	409(27.9)	47(33.3)	38(35.5)	27(28.4)	21(20.0)	133(29.7)
その他	28( 1.9)	2 ( 1.4)	1 ( 0.9)	4 ( 4.2)	3 ( 2.9)	9 ( 2.0)

	陝 西	甘 肅	江 蘇	安 徽	浙 江	福 建
総 数	78	53	65	55	77	62
4 字 缺	2 ( 2.6)	5 ( 9.4)	11(16.9)	3 ( 5.5)	0 ( 0.0)	8 (12.9)
3 字 缺	13(16.7)	10(18.9)	16(24.6)	12(21.8)	20(26.0)	5 ( 8.1)
2 字 缺	14(17.9)	19(35.8)	25(38.5)	27(49.1)	26(33.8)	29(46.8)
1 字 缺	12(15.4)	9 (17.0)	7 (10.8)	1 ( 1.8)	0 ( 0.0)	7 (11.3)
無字缺	37(47.4)	7 (13.2)	5 ( 7.7)	11(20.0)	31(40.3)	13(21.0)
その他	0 (0.0)	3 ( 5.7)	1 ( 1.5)	1 ( 1.8)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)

	江 西	湖 北	湖 南	広 東	広 西	四 川
総 数	77	68	67	87	93	123
4 字 缺	4 ( 5.2)	3 ( 4.4)	3 ( 4.5)	4 ( 4.6)	1 ( 1.1)	0 ( 0.0)
3 字 缺	18(23.4)	13(19.1)	16(23.9)	9 (10.3)	3 ( 3.2)	15(12.2)
2 字 缺	29(37.7)	12(17.6)	14(20.9)	23(26.4)	23(24.7)	42(34.1)
1 字 缺	13(16.9)	12(17.6)	16(23.9)	20(23.0)	25(26.9)	37(30.1)
無字缺	13(16.9)	27(39.7)	18(26.9)	27(31.0)	39(41.9)	28(22.8)
その他	0 ( 0.0)	1 ( 1.5)	0 ( 0.0)	4 ( 4.6)	2 ( 2.2)	1 ( 0.8)

	貴 州	雲 南
総 数	48	65
4 字 缺	0 ( 0.0)	2 ( 3.1)
3 字 缺	11(22.9)	5 ( 7.7)
2 字 缺	17(35.4)	27(41.5)
1 字 缺	10(20.8)	16(24.6)
無字缺	8 (16.7)	12(18.5)
その他	2 ( 4.2)	3 ( 4.6)

蘇省、安徽省、江西省、甘肅省、福建省の5省である。貴州省が1.60で6番目、直隸が1.58で7番目の高さであることのみ付言しておく。百年を越えるタイムスパンにもかかわらず、江蘇省、安徽省、江西省、甘肅省、福建省の文字缺の構成比には大きな変化が見られない。若干の出入りがあるわけであるが、分析の対象になるほどではない。

行政管理難易度が低いのは、広西省、陝西省、山西省、広東省、湖北省の5省である。広西省では数値は変わらないが、構成の点で、2字缺が2県、無字缺が5県減少し、1字缺が6県増えてバランスしている。陝西省、山西省、湖北省にはほとんど変化が見られない。広東省では4字缺が1県、3字缺が1県増大する一方、2字缺が2県、1字缺が1県、無字缺が3県減少し、さらに、地方行政機構の調整が行われた<sup>(14)</sup>。

首都圏についてみると、直隸では行政管理難易度が僅かに低下している。4字缺が1県増えた他に、1字缺が7県減少し、無字缺が5県

増えている。無字缺が増えた分、数値が若干低下しているわけである。山東省でも、山西省でも目立った変化はない。数値の若干の低下を裏付ける変化が観察されるだけである。河南省では、3字缺と1字缺が減り、2字缺と無字缺が僅かに増えた。首都圏全体でみると、1字缺の8県減少が多少目立つが、全体的にはバランスされている。

「缺」構成についての分析はここまでとし、次に項を改めて「衝繁疲難」文字構成の分析を行うこととしたい。そこでは、資料分析はいっそうの具体性を帯びることになる。

- (1) この表示法の形成には明末以来の豊穰な試みがあったことを忘れることはできない。その背景に言及した研究として、和田正広「明代の地方官ポストにおける身分制序列に関する一考察」(『東洋史研究』44-1, 1985年)、大澤顕浩「『詞章之学』から『輿地之学』へ」(『史林』76-1, 1993年)がある。また、この成立の過程を清代の人事制度全般と関連づけた研究として、近藤秀樹「清代の銓選」(『東洋史研究』17-2, 1958年)がある。この制度の実際の面を分析した論文として、G.W.Skinner, "Cities and the Hierarchy of Local Systems", in *The City in Late Imperial China*, ed. G.W.Skinner, Stanford University Press, California, 1977がある。本稿は北京首都圏のみを分析対象とした次の別稿を敷衍する意味を持っている。「清代の地方行政管理における『北京首都圏』の特質」『環日本海研究年報』第6号, 1999年3月。

- (2) 乾隆10年(1745年)刊『縉紳新書』、清華大学図書館典籍部所蔵。同書の冒頭部分には「附各官相見儀註俱遵雍正八年(1730年)」とある。この乾隆10年(1745年)の『縉紳新書』はあるいは衝繁疲難の全国各地の分布を体系的に記述した最も古い資料なのかも知れない。清華大学図書館にはこの他、雍正5年(1727年)の『爵秩新本附中枢備覧』が所蔵されていたが、当然のことながら同書には衝繁疲難の記載はなかった。本稿が使用した資料はその他に4種類ある。以下で便宜上1757年、1809

年としたものは、北京第一歴史檔案館所蔵資料である。同檔案館における整理番号は「案卷16号」であり、「吏部選調関於全国各省府県官缺表」とされていた。この「案卷16号」は実は全国各府州県の衝繁疲難を記載した2枚の大きな表である。筆者は、この2枚の表を考証するにあたり、便宜上、「16号A」と「16号B」という区別を与えた。両表ともに幅は約2m50cm、高さ約1m60cmから80cmの堂々たるものであった。両表とも10列になる文字列が上下2段組みになっており、上下それぞれ第1列に省の名前があり、各省につき省名の下の1列に府名が書かれ、さらにその下8列に散州と県名が記載されているという構成の点で非常に似通ったものであった。ただ、次の4点において両者にはかなり明白な違いがあった。(1)色彩的には「16号A」が黄土色であるのに対し、「16号B」の方は非常に鮮やかな黄色であった。(2)また、幅は同じ2m50cmであっても、「16号A」は縦が1m80cmあり、他方、「16号B」の方は高さは1m45cmしかなかった。もっとも、「16号B」の方は、明らかに、下15cmほどが完全に切り放され紛失していた。(3)何より、「16号B」の方は痛みが激しく判読不能箇所が相当に広がっていた。さらに、(4)省名の配列に大きな違いがあった。また、これは年代考証の決定的な根拠になった点でもあるが、(5)「案卷16号B」には直隸庁・散庁が入っているのに対し「16号A」にはその記載がなかった。上記(5)に典型的なように、そこに記載された行政機構名を詳細に検討することで、これら2表の考証は基本的に可能であった。そして、最終的には、河南、江西、湖北などの記述から、「16号A」については、上述のとおり、1757年(乾隆22年)から1758年(乾隆23年)にかけての記載、「16号B」については1809年(嘉慶14年)から1810年(嘉慶15年)の記載と判断したのである(これらの資料を考証したものとして、筆者「乾隆期『全国各省府県官缺表』考」(『歴史档案』総第47期, 1992年)がある)。以下で挙げる1757年の資料は「案卷16号A」によるものであり、1809年の資料は「案卷16号B」によるものである。1788年(乾隆53年)の資料は、従来かなり早期のも

のと見なされてきた洪亮吉の地理書、『乾隆府州県図志』にもとづく  
 (近藤秀樹は1958年の前掲論文で「員缺登録の公式記録は、嘉慶会典記載のものが、最初のもののである」とし、それに先立つものとして、1788年の洪亮吉『乾隆府州県図志』(乾隆53年の自序)の参照を求めている。また、和田正広は前掲論文にて1763年(乾隆28年)の『大清仕籍全書』を資料として用いている)。1911年とした資料の典拠は、『清史稿』の「地理志」であるが、あくまで便宜上の年代に過ぎない。正確に記するとすれば、漠然と清末という他にはありえないだろう。

(3) 乾隆『大清会典』巻8「戸部」。

(4) 筆者『明清地方行政制度研究』(1997年9月、北京燕山出版社)、75-76頁。

(5) 同上書、62-63頁。

(6) ここでデータの基礎となるのは、全国1466の県と散州である。以下、繁雑さを避けるために、「州、県」と呼称せず「県」の呼称に統一する。

(7) 1809年のデータには破損が多い。読みとり不能箇所は全1466県のうち15.9%にとどまるものの、破損箇所は全国18省中の10省に散在する。まったく破損を受けていない省もあるため、敢えて取り上げたが、ここではあくまで参考数値とする。したがって、平均値の算出等には1809年のデータは全く使用していないし、分析の論述においても、一切言及していない。

(8) 江蘇、安徽、浙江の3省は言うまでもなく「江南」と呼ばれた経済の先進地域であった。ここではさらに、長江流域のうち江西省が行政管理難易度の高い地域に含まれていることを指摘しておく。もっとも、江西省の数値の高さの理由は別途求められなければならぬ。湖北省、湖南省が中間グループをなすのは、16世紀以来の江南に代わる湖広地域の米作地帯としての役割によるのかも知れない。

(9) 甘肅省と陝西省との数値の違いは際だっている。甘肅省の数値の高さは同地が乾隆年間にいたっても新しい開拓中の土地だったことによるの

ではないか。また、甘肅省の行政管理難易度は時代の推移に伴って傾向的に低下しており、あるいは開発の落ち着きに伴うものと解釈できるのかも知れない。福建省の数値の高さ、広東省の数値の低さについても別に説明が必要であろう。

- (10) 陝西省の無字缺は37県あり、構成比47.4%は国内最高値である。ただし、絶対数では直隸の方が多く、39県ある（構成比は27.7%に過ぎない）。その他、無字缺の絶対数は山東省で35県（32.7%）、河南省で31県（29.5%）、広西省で31県（33.3%）となる。無字缺の構成比順では、陝西省、広西省、山東省、広東省（32.2%）、河南省（29.5%）、湖北省（29.4%）となる。
- (11) 江蘇省では4字缺が2県、3字缺が1県減少し、2字缺が5県、1字缺も2県増えている。また、無字缺が4県減少している。甘肅省では、3字缺が5県、1字缺が2県減少し、2字缺が6県、無字缺が1県増えている。江西省では、3字缺が3県、1字缺が1県減り、2字缺が4県増えている。
- (12) 全国で64県増大した3字缺県の分布は、直隸省6県増、山東省3県増、山西省3県増、河南省4県増、陝西省8県増、甘肅省5県増、江蘇省4県増、安徽省5県増、浙江省3県増、福建省1県減、江西省増減なし、湖北省2県増、湖南省6県増、広東省増減なし、広西省1県増、四川省増減なし、貴州省6県増、雲南省8県増である。
- (13) 1788年の統計の資料は、前掲註（2）の通り、洪亮吉の地理書、『乾隆府州県図志』にもとづいている。他の時代の資料が概ね公式、乃至は準公式であるのに対し、『乾隆府州県図志』は私人の著作であるという性格を免れない。加えて、当該資料を用いた行政管理難易度の平均値が他の資料によるものよりも幾分高めであるという事情を考慮すると、当該資料を他の資料と同列に扱えるか否か、若干の疑念なしとしなかった。けれども、例えば、雲南省では、1745年、1788年、1911年の行政管理難易度がそれぞれ、1.32、1.35、1.43とほぼ同じレベルにあり大き

な偏差を見せないのに対し、1757年の資料の方が却って1.00という偏差を見せている。この事例に鑑みれば、1788年資料にはスタンダードの違いという問題は特段存在せず、他の資料と同列に扱って構わないと判断するに至った次第である。したがって、筆者としては、『乾隆府州県図志』にもとづいた統計の数値の高さは、資料の問題ではなく（資料のスタンダードに問題があるのではなく）、現実の行政管理難易度を反映した結果であるとの前提に立っている。

- (14) 肇慶府陽江県、瓊州府崖州、連州直隸州連山県の1州、2県がそれぞれある。陽江県は1867年に直隸州に昇格、崖州は1905年に直隸州に昇格、連山県は1815年に連山直隸庁に昇格した。